

リー・マキシー、楊博 *Between*

2023年7月5日(水) - 8月12日(土) 火曜-土曜 12:00-19:00 日月祝休み

オープニング・レセプション: 7月5日 17:00 - 19:00

Yutaka Kikutake Gallery では、ニューヨーク、ブルックリン在住のリー・マキシーおよび、東京を拠点に活動する楊博（ヤン・ポー）による二人展を開催いたします。二人の画家に共通するのは、絵画という媒体を通じて表現される、ある対象と別のものとの境界や、距離感へのアプローチです。現代社会に生きる誰もが親近感を抱くようなパースペクティブ - ポップカルチャー的アイコンから、部屋の窓枠が切り取る日常の風景まで - がモチーフとして登場するのも特徴的と言えるでしょう。本展 *Between* において、ルーツの異なる二人の画家がそれぞれの表現に取り組み、また近年の社会的変化や時代の流れに敏感に反応することで深度を増したその絵画的実践の成果を発表します。

1988年アメリカ合衆国アーカンソー州に生まれ、現在ブルックリンに活動拠点を構えるリー・マキシーは、日常と非日常、内と外など、境界のテーマに着目し制作を行って来た作家です。人々がどのようにそれぞれの視点で現実を見ているかについて関心を持っていると語るリーの作品は、切り取られた他愛ない日常の風景が神秘性を帯びる瞬間について考えさせるかも知れません。蔓延る低木が死による生への侵食を想起する *Spector* (2023年)、茂った草原と枯れた大地という異なる二つの状態の境界が印象的な *Unmoved* (2023年)をはじめ、エッグテンペラを用いて描かれる彼女の作品は、夢と現実の狭間を漂うような独特の存在感を帯びています。一方、*Purgatory* (2022年) (キリスト教の「煉獄」を意味する) に登場する柵は、自宅の窓から見えた角度で描かれると同時に拷問を連想させる構図となっており、極めて敬虔な家庭で育ち後に離脱したというリーが試みる、聖書的なシンボルに対する複数解釈の可能性が示唆されています。作家が制作に使用するエッグテンペラはまた、中世において宗教絵画が描かれる際の主要な媒体でした。見慣れたモチーフにこだわり、死後の世界と対照的な今ここにある日常風景に潜む神秘性を描き出す試みも、ある種の宗教教育への応答と言えるでしょう。

1991年中国湖北省に生まれ、2001年に家族とともに日本に移住した楊博は、これまで一貫して映画や音楽に代表されるポップカルチャーとその受容に関わる距離感をテーマに作品を制作してきました。実際にはとても遠くに存在する人物や出来事にも関わらず、心理的には極めて親密なものとして迫りくるそれらの肖像と、自身の生活風景を織り交ぜた独特の作品世界を構築しています。

近年、作家は「Mood」という単語を思い描いた作品を手掛けていますが、本展でも新作を発表する予定です。論理や客観的な事実よりもムードによってときに人は動かされるという楊の言葉は、現代日本に蔓延する同調圧力的な空気や、小さなネットニュースが感情の連鎖を引き起こすような社会の様相についての考察をも含んでいるようです。SNS の Like から着想を得たというハート型の新作群には、月やスバルのエンブレムなど作家が選んだモチーフが描かれています。既に歴史化されつつある対象に惹かれることが多いと作家自身が語るように、毎日のように目にする Like の表象は、我々の日常生活に内実化され、あるいは既に更新されつつあるアイコンであるとも言え、楊の鋭い感性に呼応した社会的実情の反映と捉えることも可能でしょう。

楊博の新作発表に加え、リー・マキシーの作品展示は、本展 *Between* が日本では初となります。境界、あるいは対象との距離感というテーマを軸に、アメリカ、あるいは中国および日本、という異なるバックグラウンドを持つ二人の画家が描き出す、みずみずしい絵画世界をぜひご堪能ください。

身近な対象に焦点を絞り、ありふれたものを支配的で神秘的な世界の奇妙なエンブレムとして歪めた形で描く。子ども時代の家庭環境における終末や死後の世界といった未来重視の価値観とは対照的に、現行の日常こそが神秘的で美しく、注目に値するものであることを示す意図がある。

日常の中に大いなる計画の兆しを見ることで生じる不安感を浮き彫りにすると同時に、平凡な世の中が十分に面白いものであることを強調している。

エッグテンペラが持つ美德や宗旨を表現する手段としての歴史の延長線上に自分の作品を重ねている。今回も、これまで取り組んできた、感覚がいかに個人的（かつ不安定）なものであるかという課題を追求した内容になっている。 -リー・マキシー

日常の中で、人と文化産物がどのような関係性を持っているのか、ということについての観察からインスピレーションを得ている。

主に都市生活においての、ポップな文化産物を受容する際の仕組みや、それにまつわる消費活動の手つきやマナーに着目し、それらを絵画制作の中でシミュレーションしている。

ポップミュージックから引用した言葉、SNS 上の記号、スターのアイコン、パンクファッションのアイテムなどが、日常的な風景と組み合わせられることによって、その間にある距離や矛盾が違和感として現れ、ある不安定で振れ幅のある印象を与えるが、それをスリリングなリアリティとして提示することにチャレンジしている。 -楊博